

From The World

最新写真便り vol.25

世界各国の写真家やライターより、最新の写真情報をお届けする当コーナー。チェックしておきたい海外のフォトグラファーやお国柄を反映した写真界の動向、思わず真似したくなる写真術などを毎回ご紹介いたします。

分割されたセルフポートレイトで表現する、“生き写し”のドッペルゲンガー

ニューヨーク (アメリカ)

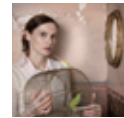
FROM NEW YORK 

text:Ihiro Hayami



PHOTOGRAPHER

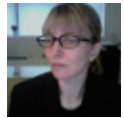
今回の注目フォトグラファー
コーネリア・ヒディガー



1967年生まれ。ニューヨーク在住のスイス人作家。ニュージャージー州ラトガー大学メイソン・グロス芸術校にて美術士号を取得。アメリカをはじめ世界各地で作品を展示。2009年、アメリカの写真雑誌「PDN」が選ぶ、「その年に最も期待する若手写真家30人」に選ばれた。2011年9月には、2年間の制作期間を経てクロンピングギャラリーにて個展を開催する。www.corneliahediger.com

SELECTOR

クロンピングギャラリー ディレクター
デブラ・クロンプ・チング



1965年生まれ。クロンピングギャラリーのオーナー兼ディレクター。過去にはイギリスのコベントリー大学で写真の実施授業、またダービー大学にて写真史の講師経験も持つ。昨年10月にカナダのトロントで開催されたブラッシュ・フォワード・フェスティバルにてアメリカのコンテンポラリー写真をテーマとした写真展をキュレーションした。

KLOMPCHING GALLERY

クロンピング ギャラリー
2007年にダレン・チングとデブラ・クロンプ・チングが共同で設立した現代写真専門ギャラリー。「ニューヨークで見逃すことができないギャラリーの1つ」として知られている。オリジナリティとクリエイティブなビジョンを持ち、優れた作品制作技術とプロとして作品制作に完全にコミットメントしている作家の作品を扱う。www.klompching.com

INTERVIEW with Debra Klomp Ching

息を飲むほど素晴らしい写真家の作品に時折出会うことがあります。2008年の春にコーネリア・ヒディガーの作品をはじめ目にしたときの私の体験がまさにそれでした。彼女の作品「ドッペルゲンガー」のシリーズから離れることができなかったのです。

このシリーズでコーネリアが探究しているのは、意識と無意識の間で起こる内なる対話と苦悶です。作品の手法は複雑で、写真の中

に空間性を造り出し、さらにその感覚をオーパーに表現する為に、何枚もの写真を複合的に使っています。作品の中に存在する1つ1つのフレームは、それぞれが1枚の完全な写真であり、色彩に富んだ作品中のモデルは写真家であるコーネリア自身です。彼女の作品は、完璧なクオリティで仕上げられており、直感、情緒、そして知性という私の写真評価軸すべてに突き刺さります。それらの作品を

見たとき心から圧倒されたのを思い出します。幸運にも、彼女の作品を見た数時間後に私は彼女に会うことができ、彼女の作品や制作について話を聞くことができました。出会いから1週間後には彼女の作品をギャラリーで取り扱っています。彼女は素晴らしい才能を持ち、1つのビジョンに対し妥協せず作品制作を続けている作家です。

エジプト100万人の反政府デモ。渦中に飛び込んだジャーナリストからの報告!

FROM CAIRO 

text:Shizuka Minami photo:Joao Pina

カイロ (エジプト)

フォト・ジャーナリストのJoao Pina (ジョアオ・ピーナ)は、ブラジルのスラム街の抗争、ベネズエラの大統領選挙、アフガン戦争など社会問題や戦場を中心に取材している。今年の1月、チュニジアでベンアリ政権崩壊の様子を取材したあと、エジプトで大規模のデモが始まったのを知りすぐエジプトに飛んだ。夜間外出禁止令のせいで飛行機が飛ばず、現地入りが3日遅れたが入国はスムーズだった。ところがカイロに着いていままでの紛争地での取材との違いに気づく。メディアが「敵」として標的にされているのだ。インターネット上でのデモの呼びかけから始まり、ムバラクが大統領を辞任するまでに数百人のジャーナリストが負傷した。いったい何が現場で起こっていたのだろうか?

「エジプト国営テレビ局は、外国人ジャー

ナリストはスパイだから捕まえられるで当然だ!という間違った情報を流していたんです。大統領支持派の軍隊はホテルや通りでジャーナリストたちを襲撃し、拘束するというかなり緊迫した状況でした」

ジョアオはフォトグラファー仲間と反政府デモの中心地となったタハリール広場のすぐ近くに宿泊していたが、身の危険を感じて別のホテルに移動した。約1km離れたホテルにタクシーで移動する際、秘密警察がむりやり乗り込んで来てあわや刑務所に連れていかれそうになったが、運転手を守ってくれたこともあり何とかその場を乗り切った。これだけを取り上げるときわめて危ない状況のような気がするが、他の紛争地に比べて命の危険性はいつもほどに感じなかったという。というも通常なら長時間の銃撃戦が繰り返され

れ爆弾も投げられたりするが、今回はそういった武器が不足していたのだ。催涙ガス対策のガスマスクも使わずにすんだという。ただ、インターネットの環境は不安定だったため、クライアントには、BGAN Satellite (衛星電話)から写真を送信したこともあった。生死と隣り合わせの紛争地の撮影について「わからないことがあれば、ベテランのジャーナリストに遠慮せず質問すること」というアドバイスをくれた。決して生死のリスクを負いすぎないことが重要だという。無事に9日間の取材を終えたジョアオは、すぐに紛争中のリビヤに飛んだ(3月10日現在)。

ジョアオ・ピーナ
1980年ポルトガル生まれ。現在パリを拠点とする。「ニューズウィーク」、「デイズ・ジャパン」、「GEO」など報道系の雑誌に写真を提供する。「Kameraphoto」というポルトガルのフォトグラファー・グループのメンバーのひとり。



左3点はジョアオ・ピーナの作品

地震災害のあったハイチの為にできること…。自費でつくった『テントライフ：ハイチ』。

FROM PORT-AU-PRINCE 

text:Shizuka Minami photo:Wyatt Gallery

ポルトープランス (ハイチ)

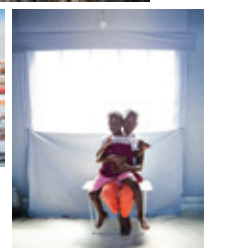
ハイチの地震後、被災地を訪ねて撮影し、その写真集を発表した写真家のWyatt Gallery (ワイアット・ギャラリー)。出版までの経緯を聞いた。2010年3月つまり地震の発生から約2ヶ月後、「経費をサポートしてくれる広告会社が見つかったから、ハイチに行こう」と写真仲間から誘われたのがきっかけだったという。渡航の手段を探していたワイアットは、即決で行くことにした。「Healing Haiti.org」というボランティア団体が宿泊先や車の手配をしてくれて、現地でも共に行動し、撮影をするだけでなく被災者に水や食料を配るなどの手伝いもした。1週間の滞在を終えてアメリカに戻ってきたワイアットは「公共の場に写真を発表することで、ハイチの為にできることがあるかもしれ

ない」と、すぐに幾つかの大手の出版社に連絡をした。興味を持ってくれたのは「Umbrage Editions」というニューヨークの出版社で、初版は2000冊に決定。ただここで壁にぶつかる。お金が足りない。現在、欧米のアート業界では自費出版が多い。貯金を使い、ローンをして募金を呼びかけたことで、なんとか資金を集めたという。2011年1月に写真集「TENT LIFE: HAITI」を発売し、写真展も開催したことでメディアの注目を集めた。売り上げの全てをハイチに寄付をする予定。ワイアットの行動力は尊敬に値する。

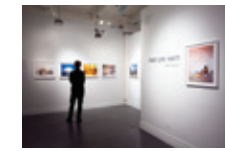
ワイアット・ギャラリー
1975年アメリカ生まれ。PDN 30をはじめ、欧米で数々の賞を受賞。「ニュー YORK・タイムズ」、「Esquire」、「Mother Jones」など、報道からファッションまで幅広い分野で撮影し、活躍している。



写真集「TENT LIFE: HAITI」表紙



写真集より



写真展の様子